

・（４からの続き）それは薬への参照に支配されているのです。結局のところ、どう私は考えているのか？そうですね。臨床部門は、完全にそのミッションを果たしているのでしょうか？ということです。そうでもない、と思います。というのは、実際、臨床部門は、大雑把に言って臨床の彼方の過程を目指しているからです。

これはあなたが使っている表現ですが、とても適切だと思います。でも、よくあるのは、それは臨床部門が、古典的な臨床の教育をショートカットして、精神分析的なカテゴリーをただちに用いるよう導かれていることです。でも私は診断の技術を教えることを、続けるべきだと思っています。ラカンがまさにボワイエ夫人の提示において、その例を与えています。彼は想像的パラフレニーというカテゴリーにかぶっていた埃を、振り払ったのです。

私にとっては、それは当時とても胸を打つものでした。それまで一度も「想像的パラフレニー」ということを聞いたことがなかったからです。私は語を探しに行き、その参考文献を見つけるのに本を沢山調べましたよ。ですから、診断の彼方へ赴くために、まずは少し診断のなかに身を落ち着けることから始めなければなりませんよ。ですから、本当のことを言うと、ラカンは精神分析においてそのような（古典的な臨床を無視する）臨床家を批判していました。

というのは、まさに、経験ある臨床家としての精神分析家というのは、すでに獲得されている知を用いるからです。長い時間をかけて得た経験により、すでに獲得したところの知です。それは経験が積み重なったものです。とは言え、それは実は、分析経験の反対のものでもあるのです。分析経験とは症例を「偏見なしに」見ることを要求します。でもそれはとても臨床家にとって難しいことなのです。症例を「偏見なく」見る。それは実のところ、ラカンが「無知への情熱」と呼ぶものの、そのものなのです。

つまり、すでに得られた知については抹消するのだという情熱を、私たちは持たなければなりません。そうして、今から到来するであろう知へと、自らを開くことが大切なのです。それは自らの無知を認めること、自らの無知を想定することですね。

そして私はビオンのこの話題についての考えがとても好きです。ビオンはイギリスの精神分析家です。戦時中、イギリスでビオンが精神科医をしていた時、すでにラカンは彼に賛辞を送っていました。ビオンは「すべて忘れなければならない、以前に行ったセッションのことすら、忘れなければならない」、と、述べていたのです。

あなたが患者と関わる時、それはあたかも初回のセッションであるかのように、そのページは完全に真っ白であるものとして始めなければなりません。まあたぶんそれは行き過ぎかも知れませんが、でもそれは正直、反臨床的な方向性を与えるということでしょう。

実のところ、考え方としては、「経験ある臨床家と経験ある精神分析家」を祝うというよりも、ラカンは「臨床家としての経験は、その人の分析主体としての分析経験を消すものである」と、考えていました。つまり、「分析家である」、「分析する」という経験は、自分が分析主体として持った経験を忘れさせていたということです。その帰結として、彼の学派で AME と呼ばれる者を区別することになったのです。AME (analyste de membre de l'école) という資格に達するのは、臨床家としての経験があり、かつ精神分析的装置を機能させることを知っている人のことでした。

しかしラカンは AE (analyste de l'école、エコールの分析家) というものを発明しました。彼らは自分の治療から分析家になったばかりの人たちで、いかなる実践もまだ持っていないかもしれません。しかしラカンは彼らを「精神分析家」と呼んだのでした。なぜなら、この分析主体は分析家の位置に対応する、主体的で独創的、原始的でもある位置を獲得したと見なされたからでした。

そういうわけでラカンは、AME には自分は興味がないと言っていました。興味があるのはただ AE のほうだ、と言っていました。よく考えてみてほしいのですが、すでに名のある人たちはまったく否定されてしまったと感じる一方で、若い人たちは逆に、ラカンによって前面に押し出されたと感じたのでした。

あとその後に出された問いというのは、「どのようにしてラカンは若者たちと接触したのだろうか」、「特にそのような綺麗でない仕方によって、古い人たち、有名な人たちと関わったのだろうか」というものですね。いいでしょう。ここまでで切り上げます。

よろしい。早く切り上げるために、『他のエクリ』の 556 頁から 557 頁を見てください。そこにはラカンが今話している方向で臨床について考えている、貴重な考察が見られますよ。

しかし私は引用する気持ちに抵抗できませんね。『ラカン、レディヴィヴス』のなかで、59 頁に、精神分析家への考察があります。そこでは、ラカンは汚されていると言わないとしないのですが、分析家の実践は多くの部分、固有の領野を避けることから成り立つと書いています。それはラカンはこういうことを言いたいのです。あなたが経験を積みば積むほど、より肝心なことから遠ざかる、と。これはラカンのパラドックスのひとつです。頻繁にあるパラドックスのひとつですね。この問いを出してくれたペネロープに感謝します。

ミッシェル・エルバ) この『レディヴィヴス』を構成する、ばらばらな資料の多様性というものは、ほとんど宙づりという様式、ラカンとは誰かというものを把握する様式に関して私たちに教えてくれるものです。

とは言え、それは空しい問いであると言いましょう。その半過去形自体も空しい、と。というのはラカンはその書物の一行一行ごとに、現在も生きており、現代的で、私たちひとりひとりに近づいてくるかのように立ち現われるからです。この書物はバロック的な作品で、反伝記的なひとつの典型であると、言っておきましょう。

そこでは多くの問いが立ち現われてきます。ひとつの転回、ひとつの位置、ひとつのエクリチュール、ひとつの行為の細部が、私たちの琴線に触れてきます。

なかでも私に現れたもの、それは〈他者〉のあらゆる囲い、あらゆる割り当てに対してラカンが存在していることです。それは〈他者〉の〈他者〉が存在しないためです。保証というものは存在しません。ラカンは、彼がそう言っているように、とどのつまり、治外法権の extraterritorial 精神分析に属しています。

私には「経験」という概念の中心性（重要性）の執拗さもまた、心に残ります。それについて、ミレールさん、あなたは直接的な関連が存在していると述べました。そのことで、その「直接的関連」とは何であるか？という問いが本当に私に提示されてきました。・・・（質問や討論がつづく・・・略）

ミレール)『ラカン、レディヴィウス』は、反伝記的な典型であるとあなたは言いましたが、それはとても適切な言い方だと思いますよ。それは私たちの意図でもあったのです。それは統合させないこと、注釈をしないこと、アルベルティさんが最初にお話しになったように、好きなように、各自がそれぞれの展望に基づいて、望むままそれらの文章を使うことができるようにと思ったのです。ですからその点について、賛成です。

賛成できない点としては、二番目に、ポジティブな仕方で、あなたが「治外法権の extraterritorial 精神分析」と語ったことです。ラカンはこの語、「治外法権の」、という語を用いています。しかしそれは、治外法権の精神分析を望むことはまったく精神分析の害のある主張であると言いたいからです。期待の外にあり、誰にも応答しない精神分析というものは害を及ぼすと主張するためだったのです。

ラカンの考えはその逆です。精神分析を死すべき者たちのあいだに運んでいき、学問的次元の要求に答えるというものでした。みんなの期待の外にあるのではないし、自らの孤島や惑星に置かれて存在することではありませんでした。

私もそう思います。精神分析はまったく治外法権的なものではありません、その逆です。国家は精神分析に興味を持たなければならないでしょう。精神分析が唱えている主張の理由を尋ねるために、です。

本当に誇張されています。というのは、現在、国家はあまりにも興味を持ちすぎているからです。精神分析が資格免状による大学の実践に同化することを、国家は望んだのですから。私たちはそれが実現しないように、出来ることをやりました[アコワイエ修正法案に対しての反対運動を指す]。

ですから、国家の善意という考え、それは本当にあまり良いものではありません。第三に、私が参照したい点としては、ラカンの才能を思い起こすためです、あるいは天才としてのラカン、です。それは明白です。ラカンは語っていましたよ。「ひとが私のことを天才と呼ぶ時、それは侮辱であると思っている」、と。それはなぜでしょうか？実は、天才というのは自分が天才だと分かっていないからです。そしてひとは天才を前にすると身をかがめることしか出来ないのです。

まさにこの点において、天才は治外法権性、人間を越えたもの *extra-humanité*、という特権を持っています。ラカンは、その反対に、証拠だてること、証明すること、少なくとも論拠づけて説明することの必要性を強調しています。至高のなかに存在することを主張したではありません。

四番目に、私はラカンに賛成です。逆に、あなたは私がラカンが行動していなかった過去について私が言ったことを強調なさったのですが、それが分析の終わりの本質です。ひとは過去を乗り越えます、そして、ひとは過去と別れます。そしてそれこそを、パスにおいて聞くことが肝心なのです。

主体は以前妨げとなっていたもの、囚われたままにしたものから、離れるのです。五番目に、私は預言者という言葉には賛成しません。予言者というのは、インスピレーションを受けた者、神によって住まわれた人、幻視をもつ人であり、幻視と直感によって、将来に近づきます。

しかしラカンはむしろ、精神分析家は時代を解釈できる者であろう、という考えを持っています。つまりひとが住まわせている欲望、作り出している適応を明らかにできる者、です。実のところ、より謙虚な言い方をすれば、どこでそれがうまく行くのか、文明を動かす力の流れを明らかにする、ということです。例えば、医学ですね。医学はラカンが言うように人間主義的（ヒューマニスト）であることから始めました。最初は言葉により、その後徐々に科学のディスコースの中に入りました。科学のディスコースが生産する器械、商品に応じて、進化しています。そしてだんだんと人々が回答を期待するのがこれらの器械に対してとなり、最終的にはこの力の流れにより、科学が医学に置き換わることになる、という考えに導かれるのです。

つまり、医学の消滅ということについて、たぶん、最悪の場合は魔術により、最良の場合は精神分析によって補完されるべきなのでしょう。ラカンはフロイトのように、アメリカ式生き方 *American way of life* の中に、ひとつの脅威を認識したのです。フロイトはそれを嫌がりました。私はそのことを明確にしておきます。ラカンはこのアメリカ式生き方をからかいました。というの

は、それはたしかに国際的な精神分析を牛耳っているのがアメリカ人たちだからです。ラカンは最終的にそこで破門されました。ラカンはアメリカ式精神分析を嘲笑したのです。

今現在は、アメリカ式生き方について、ひとはもう語りません。なぜなら、それは私たち自身の生き方になったからです。あなたはネットフリックスのようなものを使いますよね、それは以前は真の感染でした。それはアメリカで見られ、今はそれは世界中で見られます。そしてすべての数字が示すのは、読書においても、文化的なイベントについても、演劇、オペラ、等々についても、それが支配しているということです。すべての人はネットフリックス化しています。それに抵抗してごらんください。頑張ってください（笑）。